

3 三十六塚

南北朝の昔、讃岐の国は幕府方の重臣細川頼之の勢力が強くて、南朝方（吉野朝廷）の形勢は次第に不利になっていた。

その時、自ら進んで讃岐の国に乗り込み、朝廷に願い出て、頼之を追討し、南朝の勢力をばん回させようとした勇将が現れた。

それがほかでもない細川清氏・同じ細川の一味ながら南朝方に味方する当時天下無双の剛力を誇った武将であった。

清氏は讃岐に下るとすぐ白峯に閉じこもったので、さすがの細川頼之もろうばいした。

そのころ、頼之は海をこえて中国筋に遠征していたからである。

頼之は急いで帰国するとすぐ宇多津に陣地を築いて、白峯の清氏の陣営に対抗した。そしてやがて起こるのが白峯合戦と呼ばれる戦いなのだが…、これがいわ



ば讃岐における南北両朝の決戦であつた。貞治元年（一三六二）の夏、白峯の入口、雄山（おんやま）の麓では凄惨な決戦が展開された。その戦跡地・それが今に残る林田の三十六塚である。

この合戦にさすがの勇将清氏も頼之の策謀にまんまとひつかかつたから耐えられなかつた。清氏は手兵わずかに三十六騎、攻め寄せる敵は一千に余る大軍、今はこれまでと清氏、甲ちゅうの緒を結ぶまもなく群がる敵中に突き入り敵の先陣、乃木備前次郎（後世の乃木大将の祖先）を始め数名の武士を、くらの前輪に引き寄せ、一刀のもとに突き殺し、群がる敵兵のひとりひとりを両腕に抱き上げては投げ飛ばす。あざやかな手並みを現わしたがいかんともしがたい。従う三十六人の従士とともに雄山の麓の湿田でとうとう最後を遂げたのである。

夏ともなれば雄山の繁み、その木陰に鳴くせみしぐれ、ただそれだけが物寂しく往時を語つたが六百年のその昔、つわものどもの夢の跡は、だれあつて、訪れる者もなかつた。



しかしいつだれの手になったのか野辺に立つ小さい石仏、それにあたりから掘り出されるさびはてた刀剣、それが戦陣の名ごりを物語っていたので、文政のころ讃岐の学者中山城山が、この地を尋ねこの石仏こそ南朝の忠臣細川清氏の戦没地と断定し、そこに石碑を立てたのがそもそもこの地の世に知られた始めである。

雄山の西、片山部落の南、白峯街道の北側、その田の中に一見それとわかる松樹の社地。それが清氏以下三十六人の霊を祭る三十六塚なのである。